



東京日々新聞

九百十四号



萬齋
二方變
草

彼の先達の先
 一人の許に至り是は後學とせしめたる病人の枕上を盛ん
 大と賛賞を蒙りて珠歌の命をもち異音同音の真言を唱
 つゝ病人の頭より手足に三ツツまで汗を流しけり病人は苦痛
 は絶へずのち憑性の真似て特の音とて道んと思ひ速に立
 ち去りて云ふ先達目と怒りて出て行かぬ証據と立る
 サ其証據を何と云ふと押 詰られ病人も
 當惑せしむるやと三本直ぐ仍も此の如く一同意
 りて病床の辺を探し求むるもより更なるけり先達又
 怒りて幾一此首生か此上ハ一針鐵筒は掛 兵と
 いふと胸つり病人は心と起直りコリヤ左官
 庄太郎との氣と落つてと之聞れよレレガ
 軀の口を塞ぎし病氣が付て居るはより
 外よ何れ付て居ぬか刑がとてさかす理
 一絶あれて居りてを多るガ此一も益
 一もきの馬鹿を真似とてとてとてと神
 奈川縣藤 頼以付ること目と怒りし一七
 台根つけれ先達の肝を潰す持不沙汰
 る類とて一構中よりとてとてとて
 逃げ帰るは不動
 馬鹿は一吐
 るは



横濱元町の商其の掃毒を煩ふ事

既に十三年の久しき一
 及ひて此の如く是の
 強き故に只此の
 き諸悟とて此の事
 折とありてこの家内
 の考も聞つて是の
 全
 感物
 のま
 らる吉田
 町之住
 り大山講
 ころ御
 備との先
 達の所
 行其次第
 とて七
 頼

